

2020. 8. 30 第五主日礼拝

I コリント 6:1-11 「互いに訴え合うこと自体敗北」

### 聖書

- 1 あなたがたのうちには、仲間と争いを起こしたら、それを聖徒たちに訴えずに、あえて、正しくない人たちに訴える人がいるのですか。
- 2 聖徒たちが世界をさばくようになることを、あなたがたは知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるのに、あなたがたには、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。
- 3 あなたがたは知らないのですか。私たちは御使いたちをさばくようになりませう。それなら、日常の事柄は言うまでもありません。
- 4 それなのに、日常の事柄で争いが起こると、教会の中で軽んじられている人たちを裁判官に選ぶのですか。
- 5 私は、あなたがたを恥じ入らせるために、こう言っているのです。あなたがたの中には、兄弟の間を仲裁することができる賢い人が、一人もいないのですか。
- 6 それで兄弟が兄弟を告訴し、しかも、それを信者でない人たちの前でするのであるのですか。
- 7 そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。どうして、むしろ不正な行いを甘んじて受けないのですか。どうして、むしろ、だまし取られるままでいるのですか。
- 8 それどころか、あなたがた自身が不正を行い、だまし取っています。しかも、そのようなことを兄弟たちに対してしています。
- 9 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、
- 10 盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。
- 11 あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、

主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。

## はじめに

先週はコリント教会にあった不道徳（不品行）の問題から古いパン種を取り除くことについて学びました。世と教会との関わりにおいて、世の価値観が古いパン種としてクリスチャン生活に悪しき影響を及ぼすことがあるなら、それを取り除くことは神さまの前にきよくあるために必要なことでした。信仰者は常に世の影響の中に生きていて、世と聖書が言う生き方とが相いれないとき、信仰者はどのような態度でその問題に臨まなければならないのかを問われています。それが5章では不道徳の問題を通して扱われたのです。続いて6章では信者同士の訴訟の問題を取り上げ、信仰者の在り方が問われています。

### 1. 訴訟の実態

コリント教会では信者同士のもめ事が起こった場合、自分たちで解決せず世の訴訟に持ち込んで解決しようとしていました。ここでパウロが残念に思っていることは、信者同士で争いがあるという事実とともに、それを訴訟に持ち込むやり方についてです。ここでの争いは、前に見た分裂分派とは違い、「日常の事柄」（4節）とありますから、生活上の問題（民事）についての争いごとです。本来なら、民事上の問題は聖徒がさばく立場にあるとパウロは主張しています。なぜなら、聖徒には「世界をさばく」権限が与えられているからです。

聖徒には世をさばく権限が与えられていました。これはどういう意味でしょうか。その背景にはイエスさまが語られたことばがあると思われます。「まことに、あなたがたに言います。人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めます。」（マタイ 19:28）。ヨハネの黙示録を見ますと、

キリストが統治される千年王国のときに聖徒たちもキリストと共に世を治めるとあり、聖徒には今の世だけでなく、来たる新しい世の審判者としての権限が与えられているのです。聖徒にはこれほどの高い権限が与えられているのですから、信者間の小さな問題や生活上の問題をさばく力があるのは当然のことだと言うのです。しかし、実際は「ごく小さな事件さえもさばく力がない」(2節)わけで、教会の悲しくお粗末な実態が露にされてしまったのです。

## 2. 訴え合うこと自体敗北

こうした教会の実態に対してパウロは次のように語りました。聖徒の権限を無視して、なぜあなたがたはわざわざ「教会の中で軽んじられている人たちを裁判官に選ぶ」(4節)のですかと。教会の中で軽んじられている人たちは、「正しくない人たち」(1節)、「信者でない人たち」(6節)と同じ意味で、教会の外の人たちを裁判官にして解決しようとする事への叱責です。さらに、「あなたがたの中には、兄弟の間を仲裁することができる賢い人が、一人もいないのですか。」(5節)と、仲裁できる人材がないことを嘆き、教会内の争いを外部に持ち出すことは、教会の証にならないと指摘しています。これは、「身内の恥を外にさらしてはいけない」という隠蔽体質を推奨しているのではなく、まず内部で解決することを求め、教会には問題を解決する力があることを証しなければいけないという意味です。確かに、教会内で起こる些細な人間関係の問題や日常の問題などをすぐに教会外の人のところを持って行き解決を図ろうとすれば、信者でない方々に“この教会は大丈夫なんだろうか”という不信を与えてしまうことは容易に想像できます。そのような教会に魅力を感じて、人々が神さまを求めてやって来ることは期待できません。

そしてパウロが一番問題だと感じたのは、本来信徒同士はお互いに愛し合うものであるのに、お互いに訴え合う姿勢そのものが信仰者として問われなければならないと言いました。「そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあ

あなたがたの敗北です。」(7節)。争いごとへの対応の仕方の中で信仰の真価が問われるというのです。信仰者は、正しくさばいてくださるのは神さまだと信じています。その神さまに委ねる信仰があれば、つまり神さまのさばきに委ねることができるなら、訴え合うことは避けられるはずです。いや、仮に不正や偽りがあったとしても、それさえも神のさばきに委ねて待つことができるはずなのです。なぜなら、正しくない者は神の国を相続することができないからです(9,10節)。

目の前で起こっている問題への対処を単に地上の問題として片づけてはいけなくて、そのことが神の国の相続と結びついているという視点が大切です。訴訟は勝った、負けたという白黒つけることが目的です。しかし信仰者の場合は、神さまの前に立てるかどうかという点から、信者間の争いごとを見る必要があるのではないのでしょうか。事実、コリント教会には「あなたがた自身が不正を行い、だまし取っています。しかも、そのようなことを兄弟たちに対してしています。」(8節)ということがあったわけですから、正しくさばかれる神さまを意識すること自体が失われていました。

補足ですが、この時代のコリント教会の状況をそのまま現代に当てはめることには注意が必要です。当時のギリシャ社会では訴訟を市民の行事として楽しむ風潮があったそうで、現代のように法体系が整っていませんでした。当時の社会の影響がそのまま教会の中に入り込み、信者間での訴訟に発展していたことを思うと、社会の中で教会のきよさを保つことの大切さと難しさを思います。願わくは、聖霊の助けをもって、世に証を立てながら教会のきよさを保って行きましょう。

### 3. 救いの恵みに歩む

訴訟の問題を通して、信仰者は神さまの前にどのような者なのかを確認しましょう。鍵は11節です。「あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊に

よって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」

信仰者はイエスさまによって救いの恵みをいただいた者です。その前後において、何も変わっていないのなら信仰を持つ意味はないと言ってもよいでしょう。生活面や価値観に変化が生じてくるためには、イエスさまと共に歩むという営みが必要ですから時間がかかるでしょう。しかし、救いの恵みをいただくということは、その前後において明確な違いが生じているのです。私たちがイエスさまの御名を信じるとき、御霊が内住され、罪と咎は洗われ、聖なる者、義なる者（神さまの前に正しい者）と認められるのです。このような内的変化がすべての信仰者の内に起こっていることを忘れてはいけません。私たちは人や自分の行いを見て、信仰者にふさわしいかどうかを判断する向きがあります。行いは結果としてついてくるものですから一つの指標にはなるでしょうが、それだけで救われているとか救われていないとか判断してはいけません。救いの事実とそれに伴う行いの部分とは、きちんと整理しておく必要があります。

信仰者は、かつては9, 10節に見るような罪の奴隷として歩んでいたとしても、今は罪の赦しと神さまの恵みの中に生きる者であり、そのことが自覚的に私たちの内側に意識づけられていくときに、生活面や価値観に変化が生じてきます。信仰生活は地道です。私たちがイエスさまのように変えられていくためには時間がかかります。子どもが大人に成長するのに何年もかかるように、イエスさまは愛と忍耐をもって私たちを励まし、戒め、養い、育ててくださっていることを感謝します。

## まとめ

教会内でのめめ事について、信仰者としてどのように対処したらよいのか考えてみました。教会が聖なるものであるなら、神さまの御心に沿った解決方法があるわけで、それを大切にしましょう。まずは、教会内の問題を自分たちの問題として真摯に受け止めることが必要です。それを他人事のように

扱ってしまうなら、お互いに訴え合うことが起こってしまうでしょう。主にあって兄弟姉妹として教会に導かれた信者同士が、愛と忍耐と寛容をもって問題を乗り越えて行く姿は美しいものです。教会にはそれができる力があります。なぜなら教会のかしらはイエスさまであり、信者一人一人には御霊が宿ってくださっているのですから。ますますきよい教会として互いに愛し合って、神さまの恵みを証していきましょう。祝福をお祈りします。